

高瀬舟と河道の変化

自動車や鉄道がなかった昔は、高瀬舟で物を運んでいました。

高瀬舟は、浅瀬を通れるように船底が平らな木造船。積荷は、下りが米や炭、薪、鉄など、上りが塩や油、畳表などの日用雑貨でした。

高梁川の高瀬舟は、秋の彼岸から春の彼岸までの間、運行されていました。それ以外の時期は、湓井（井尻野）から田に水をひくために井堰が作られ、通行ができなくなるためです。



かつて、高梁川を渡るための渡しという舟が活躍していた



現在、湓井（井尻野）にある井堰は鉄筋コンクリート製だが、それ以前は、毎年田植え前に井堰を作り、秋には取り壊すという作業を毎年行っていた



高梁川を往来していた高瀬舟。これは舟を上流に引っ張りあげているところ



総社市内では、その昔、高梁川は、今の中原と真壁の境付近(写真のなかの部分)を流れていた

高梁川は、新見市の花見山を源に、約110kmを流れ下り、瀬戸内海へと出ます。源流から総社市付近までは流れが急です。そこから河口まではゆるやかな流れとなります。

上流から流れてきた土砂は、長い年月をかけて下流に堆積し、総社市や倉敷市に広い平野をつくりました。広い平野ができた理由は、川の流れるコースが変化したことや、流れがゆるやかであったためです。

こうしてできた平野はたいへん肥沃な土地で、現在でも稲作を中心に多くの農作物が栽培されています。



新見市付近。深い谷の底を流れ、流れは急である



総社市福谷付近。流れもかなりゆるやかになり、おだやかな川面を見ることができる。このあたりから川幅も広くなり、400mから1300mにもなる



河口付近。高梁川はいくつかの支流とともに一つの大きな流れとなり、工業地帯の真ん中を通り瀬戸内海にそそぐ